

## 研究所一〇年の歩み

### ―回顧と展望―

名古屋市立大学人間文化研究所 所長 寺田 元一

二〇一五年二月五日、人間文化研究所では開設一〇周年を祝し、「『人間、地域、共生』をめざして―研究所の一〇年、回顧と展望―」と題して、記念講演（馬場駿吉先生「美術は身体にどう向き合ってきたか」と公開シンポジウムを開催した。本年はちょうど、人文社会学部開設二〇周年、名古屋市立大学開学六五周年とも重なり、学長からのあいさつも頂戴し、一〇〇名弱の参加者にも恵まれて、充実した会となった。「人間文化研究所年報」今号はその講演とシンポジウムを特集する形で編集されている。

特集に先立ち、読者のみなさんに、人間文化研究所の一〇年史をまずは紹介しておきたい。研究所は二〇〇五年四月に、人間文化研究科附置研究所として、滝子キャンパス一号館（人文社会学部棟）七階（当初一階）に開設された。目的は、教育研究の充実と地域社会への貢献である。「人間、地域、共生」を研究

所活動の柱に据え、「共同研究プロジェクトチーム」とともに活動を推進してきた。その成果は今号で一号となる『年報』などで発信してきた。また、「公開シンポジウム」「サイエンスカフェ」「マンデーサロン」などを開催し、研究成果を地域社会に還元する活動も積極的に展開してきた。さらには、阪井研究所長の時期を中心に、名古屋博物館との緊密な連携が形成され、共同で、教育研究に関わる種々の催しを開催してきた。ちなみに、歴代の研究所長（カッコ内の数字は在任年数）は以下の通りである、①村井忠政（二〇〇五～六）、②福吉勝男（二〇〇七）、③山田明（二〇〇八～九）、④阪井芳貴（二〇一〇～一三）、⑤寺田元一（二〇一四～一五）。

それでは、この一〇年間の研究所の活動の基軸が何だったかを、これまでに実施してきた「共同研究プロジェクト」と講演・シンポジウムを

ふりかえりながら、具体的に示すことにしよう。初代の村井所長が、名古屋地区での多文化共生のリーダー的存在だったこともあり、初期には多文化共生に関わる活動が中心になされている。二〇〇五年度の研究所主催シンポジウムのテーマは「多文化共生の条件を考える」であり、「名古屋市と東海三県における多文化共生の現状と課題」が研究プロジェクトとしても展開されている。その成果は、年報の第二号で「トランスナショナルリズム」第一部 越境の文学 第二部 外国人住民との共生」という特集として、発信されている。年報創刊号の「宗教と共生」という特集も、広義の多文化共生を扱うものである。

その後、研究所長も代わり、研究所の活動としては、多文化共生が多少後景に退き、研究プロジェクト「次世代育成支援」が石川洋明先生、「障がい児発達支援」が滝村雅人先生を中心に展開されていた。その二つが年報第三号で特集されている。公共福祉に哲学的に関心を持つ福吉研究所長らしい企画と言えよう。残念ながら石川先生は昨年度、滝村先生は今年度物故されたが、とりわけ「次世代育成支援」は谷口由希子先生などによって「ようこそ大学へ！プロジェクト」施設の子どもたちへの学

「智支援」へと形を変えて継承されている。

第三代の研究所長である山田明先生を中心に発展したのが、研究プロジェクト「名古屋と観光」である。このプロジェクトは多少名前を変えながらも、現在に至るまでずっと継続され、その成果は『名古屋の観光力』（風媒社、二〇一三）として公刊された。そこには谷口幸代先生（現在、お茶の水女子大学）による「名古屋の文学―俳人・馬場駿吉の見た名古屋」が収録されており、今回馬場先生に記念講演をしていただく機縁を作ってくれた。二〇〇八年には研究所後援だが、「観光まちづくりの国際比較、ペーチ（ハンガリー）と名古屋から考える」というシンポジウムが開かれ、年報第四号では「名古屋と観光」が特集されている。今回山田先生にはパネリストとして登場いただき、「名古屋と観光」に関する発表をしていただいたが、重要なことは、この研究プロジェクトが、山田先生が退職された後も在職教員に継承されて続いている点である。年報第五号の特集は「持続可能な社会」で、その際に「五周年記念シンポジウム」も開催されているが、プロジェクトも持続的に発展させることが求められており、「名古屋と観光」はその模範となっている。

第四代研究所長は阪井芳貴先生である。阪井先生は沖縄の専門家で、沖縄と本土を結ぶ活動を多面的に展開されているが、所長としては、名古屋市博物館を中心に、博物館と大学・研究所の連携を一貫して追求された点が最大の業績である。就任一年目に講演会・シンポジウム「博物館と大学がつくりだす魅力あるまち―市博物館と市立大学の新しい取り組み―」、二年目に「文化財を守る」、三年目に「近代」の文化財―産業遺産Vの保存と継承―、四年目に「現代社会における文化財保護の新しいあり方―パブリック・アーケオロジ―の視座から―」を開催し、年報第六号では「博物館と大学」、第七、八、九号は講演会・シンポジウムのテーマをそのまま特集している。そこでは、博物館と大学が連携し、互いの教育研究資源を活かして、文化財保護やそれを通じたまちづくりをいかに進めるかが一貫して扱われており、実際そうした連携の中から、市博物館と市立大学が共同企画した展覧会やイベント、学生サポーターも生み出されていた。今回のシンポジウム報告でも、阪井先生には博物館連携を中心に博物館の活動をふりかえっていた。第五代所長を寺田が務めた期においては、人文社会学部がESD（持

続可能な社会のための教育）を理念として改組したこと、名古屋でユネスコのESD国際会議が開催されたことから、HESDFォーラムの開催に合わせて、講演・シンポジウム「中部の里山資本主義」を開催し、年報第一〇号でそれを特集した。ESDは、本学では成玖美先生（現在、名古屋大学）がインキュベーターの役割を果たし、その種が芽を出して現在に至っている。初期の活動は年報第五号で特集されているが、二〇一四年にはESDが、さらに多面的に展開されたと言えよう。しかし、ESD国際会議終了後は、残念ながら全体に本学の活動も弱まっている。

このように一〇年の歩みを順を追って見ていくと、「人間、地域、共生」という共通テーマを追求しながら、グローバルな文脈や時代状況、主体的問題意識などに応じて、研究所が変化発展してきたことがわかる。他方で、内容を多様化し深めつつも、「名古屋と観光」のように初期から一貫した主題を追求してきたプロジェクトもある。「名古屋と観光」と並ぶ双壁として、土屋勝彦先生（現在、名古屋学院大学）を中心とする「越境の文学」を紹介したい。このプロジェクトは「世界文学における混成的表現形式の研究」、さら

には「ポストエスニック時代の文学におけるオムニフォンの意義」へと二一世紀にふさわしくグローバルな文脈へと問題を深化させてきた。そこから、人間文化研究叢書として出版された「反響する文学」（風媒社、二〇一一）など、いくつかの共編者が編まれ、高い評価を得てきた。また、このプロジェクトが開催した多くのシンポジウムは、文学の実作者、研究者、読者市民が集って議論する協働の場を創出してきており、その面でも先端的であった。土屋先生の報告からは、写真などを通じて、そうした場の醸成する協働の活気を感じることができる。

久保田健市先生はESDを意識されて、「持続可能な開発に対する心理学・教育学の貢献と可能性」という題目で、主としてESDと関わる人文社会学部ならびに人間文化研究所の将来の教育研究や地域連携を展望する発表をされた。そこから、研究所の初期に主要な課題として取り組んだ「多文化共生」が再び課題として浮かび上がったのは、たいへん教訓的であった。というのも、研究所は「人間、地域、共生」という共通テーマで、この一〇年多面的活動を展開し、確かに多くの成果を上げてきたが、その一方で、キーパーソンの存在がいなくなると、プロジェ

クトが中断するという問題点も抱えてきた。その問題を克服して継続しているのが「名古屋と観光」だが、「越境の文学」も土屋先生が大学を移られて、継続性が危ぶまれている。その中で、初期の「多文化共生」を、その数年後に新たな文脈で継承する久保田先生の発表がなされた。改めて、このような温故知新的な持続可能な継承発展が研究所に求められていることを、痛感した。

当日シンポジウム会場には、年配の方を中心にさまざまな聴衆が参加されていた。その方たちから興味深い質問や意見がいくつも出てきた。私の注意をもっとも引いたのは、障がいをもつ小学生（最前列で参加）の父親の方から発せられた質問だった。それは研究所の課題にインクルージョンを含めてほしいという要望を含むもので、研究所が初期には「障がい児の発達支援」にも取り組んできたことから、当然の要望であった。同時に、その方が「越境の文学」に示された関心が非常に印象的だった。作家たちの越境という行為のうちに、障がい児と健常児の学校教育での選別を「越境する」試みを読みとり、「学問にはすべてつながりがあることを実感した」と述べられたのである。

このような参加者のみなさんの

感想にも勇気づけられながら、「人間、地域、共生」として取り組んできたこれまでのプロジェクトを批判的に回顧するとともに、今後のプロジェクトを、ESDという新たな課題も意識しながら、グローバルな歴史的文脈において、学際的かつ実践的に継承発展させていくこと。これこそが、現在の人間文化研究所に求められている。馬場先生の記念講演は、そうした問題全体を検討考察するための参照軸を与えるものであった。それを改めて熟読玩味しつつ、『年報』今号を、みなさんといっしょに人間文化研究所の今後を考えていくための契機にできれば、研究所長としてこの上ない幸せである。